

# 上八木田 II 遺跡発掘調査報告書

## 序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告の盛岡市上八木田Ⅱ遺跡は、新盛岡競馬場の建設に際して、平成2年度の発掘調査によって縄文時代の狩場跡や平安時代の集落跡であることが明らかとなりました。この報告書が、研究者のみならず一般に広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書の作成に御援助を賜りました岩手県競馬組合、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に感謝申し上げます。

平成5年1月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 工藤 巖

## 例 言

1. 本報告書は、岩手県盛岡市新庄字上八木田33-1ほかに所在する上八木田II遺跡の調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、新盛岡競馬場の建設に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と岩手県競馬組合との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡台帳の遺跡番号はL F 18-1121、調査略号はK Y II-91である。
4. 発掘調査は平成3年4月8日から6月19日まで行った。調査面積は6,000㎡である。
5. 発掘調査は、佐瀬 隆・佐々木弘・神 敏明が担当した。
6. 報告書の作成は、佐瀬 隆が担当した。
7. テフラの分析は、有限会社古環境研究所に依頼した。
8. 石質鑑定は、佐藤二郎氏（佐藤地質工学研究所）に依頼した。
9. 炭化材の樹種鑑定は早坂松次郎氏（岩手県木炭協会）に依頼した。
10. 調査に際しては、盛岡市教育委員会のご協力をいただいた。
11. 調査に関わる諸記録、遺跡等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

# 目次

序  
例言

## 本文

I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の位置と立地	3
III. 調査の方法	5
IV. 遺構と遺物	7
(1) 竪穴住居跡	7
(2) 住居跡状遺構	17
(3) 陥し穴状遺構	18
(4) 土坑	19
(5) 焼土遺構	20
(6) 遺構外出土遺物	24
V. まとめ	39
付編 岩手県、上八木田II遺跡のテフラ検出分析	41

## 図

図1 遺跡の位置	2	図12 VF7i住居跡状遺構	17
図2 遺跡付近の地質	3	図13 陥し穴状遺構	21
図3 土層断面	4	図14 陥し穴状遺構・土坑	22
図4 土器実例凡例	5	図15 土坑・焼土遺構	23
図5 調査区および遺構の配置	6	図16 遺構外出土遺物(土器1)	26
図6 VG7g住居跡	9	図17 遺構外出土遺物(土器2)	27
図7 VG7g住居跡出土遺物(1)	10	図18 遺構外出土遺物(土器3)	28
図8 VG7g住居跡出土遺物(2)	11	図19 遺構外出土遺物(土器4)	29
図9 VH2b住居跡	14	図20 遺構外出土遺物(土器5)	30
図10 VH2b住居跡出土遺物(1)	15	図21 遺構外出土遺物(土器6)	31
図11 VH2b住居跡出土遺物(2)	16	図22 遺構外出土遺物(土器7)	32

図23 遺構外出土遺物（石器1）……………34	図25 遺構外出土遺物（石器3）……………36
図24 遺構外出土遺物（石器2）……………35	図26 遺構外出土遺物（石器4）……………37

## 図 版

図版1 遺跡全景・遺跡付近の地形……………49	図版13 土坑……………61
図版2 土層断面……………50	図版14 焼土遺構……………62
図版3 VG7g住居跡……………51	図版15 遺構外出土遺物（土器1）……………63
図版4 VG7g住居跡土坑・出土遺物……………52	図版16 遺構外出土遺物（土器2）……………64
図版5 VG7g住居跡・出土遺物……………53	図版17 遺構外出土遺物（土器3）……………65
図版6 VH2b住居跡……………54	図版18 遺構外出土遺物（土器4）……………66
図版7 VH2b住居跡土坑・出土遺物……………55	図版19 遺構外出土遺物（土器5）……………67
図版8 VH2b住居跡・出土遺物……………56	図版20 遺構外出土遺物（土器6）……………68
図版9 住居跡状遺構……………57	図版21 遺構外出土遺物（土器7）……………69
図版10 陥し穴状遺構……………58	図版22 遺構外出土遺物（石器1）……………70
図版11 陥し穴状遺構……………59	図版23 遺構外出土遺物（石器2）……………71
図版12 陥し穴状遺構・土坑……………60	図版24 遺構外出土遺物（石器3）……………72

## I 調査に至る経過

新盛岡競馬場の建築構想は、現在の競馬場周辺が住宅地となったことによる競馬開催時の交通環境の悪化や騒音、施設の老朽化などの問題が表面化した昭和50年に提案され、昭和58年3月に盛岡市新庄字八木田地区が計画予定地と決定された。計画地の総面積は129ヘクタールであり、建設工事は昭和63年から平成7年までの8カ年計画である。

事業の着手にあたり、昭和63年に岩手県教育委員会と盛岡市教育委員会が遺跡の分布調査を実施した。さらに平成元年に盛岡市教育委員会は上八木田Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡の試掘調査を実施し、縄文時代や古代の遺構と遺物包含層を確認した。これらの結果をもとに、岩手県教育委員会は岩手県競馬組合と協議を行い、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの事業として上記4遺跡のうち上八木田Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡を平成2年度の受託事業とし、上八木田Ⅰ・Ⅱ遺跡を平成3年度の受託事業として発掘調査を実施することとした。

これにより、当埋蔵文化財センターは平成3年4月1日付け委託契約により、上八木田Ⅱ遺跡の調査に着手することとなった。

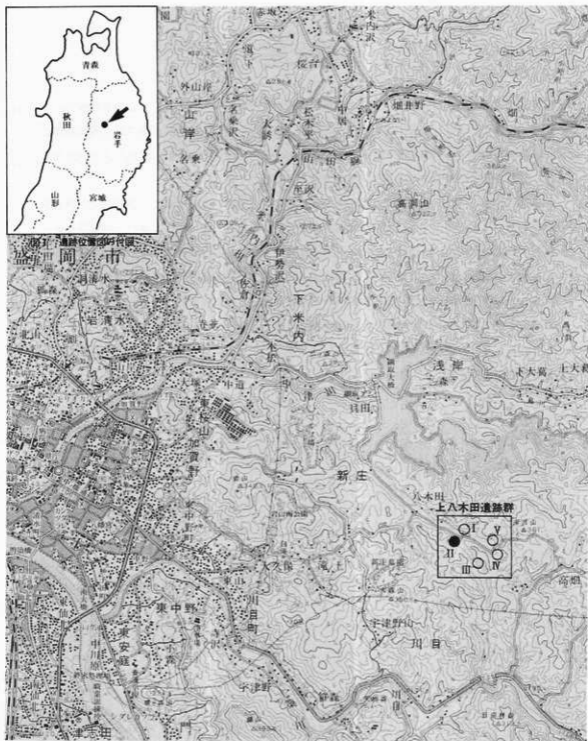


図1 遺跡の位置 (国土地理院、5万分の1盛岡の一部使用)

## II 遺跡の位置と立地

上八木田II遺跡は、盛岡市街地の東方、盛岡市役所からの距離約5km、北緯39°42′、東経141°13′の地点に位置する。北方には尾根を一つへだてて盛岡市の水源地である綱取ダムがあり、また通称八木田沢と呼ばれる浅い谷をはさんで北側には、上八木田I遺跡がある。遺跡付近の地形は、隆起準平原とされる北上山地中央部西縁の小起伏山地で(岩手県、1978)、高度は300~400mである。ここは、北上山地の地質構造を南北に二分する早池峰構造帯とよばれる深部断裂帯の西端部にあたる。地層は走向NW-S Eの先第三系の粘板岩、輝緑凝灰岩が卓越し深成岩類の貫入がみられる(図2)。遺跡の北側の八木田沢をはじめとする近辺の地形配列をみてみるとNW-S Eの方向性を示すことが多く、地質構造に規定されていると推定される。上部の古期岩類は、深層風化作用を受けていたり赤色風化殻を伴うことがある。これは、最終間氷期あるいは、それ以前の温暖期に形成されたと考えられている。

上八木田II遺跡は山麓緩斜面あるいは岩屑堆積面に立地する。この地形面は最終氷期の寒冷な気候のもとで凍結破砕作用で生産された岩屑がソリフラクション等の周水河地形形成の営力により移動、堆積して形成されたもので、粘土質ローム土を基質とする粘板岩の角礫層を構成層としている。この岩屑堆積面はテフラを主体とした風成塵により被覆され、その最上部は土壤生成作用により黒色土(黒ボク土)が形成されている(図3)。黒色土の生成は、一般的に考えられているように気候が温暖湿潤化する完新世に入ってからすなわち1万年以降に開始したものと推定される。黒色土の最下部あるいは直下の粘土質ローム土に黄褐色を呈するテフラがレンズ状に介在することがある。これは「十和田中掬テフラ」と同定される(付編)。「十和田中掬テフラ」は「安家火山灰」と同一層と考えられており、その年代は約5400年前である。上

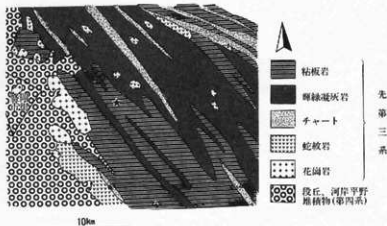


図2 遺跡付近の地質 (長谷地質調査事務所(1981)による)  
★上八木田II遺跡



記した黒色土と「安家火山灰」の層位関係は、黒色土の形成開始時期を1万年前以降とした先の推定を支持する。

図3は、調査区内の土層断面を示したものである。最上部のI層は、細根にすこぶる富み極めて粗しょうである。土色は黒褐色(10Y R2/2)で土性はシルト質ロームを呈する。II層は腐植に極めて富む黒色(10Y R1.7/1)土である。土性はシルト質ロームで細根に富みやや密である。主要な遺物包含層である。III層は褐色(10Y R4.5/6)を呈し、粘土質ロームの土性を有する土層である。堅密の程度は密で、小角礫を含む。最上部は早期の土器の包含層である。IV層は、暗褐色(10Y R3/3)を呈する一種の埋没腐植層と推定される土層である。土性は粘土質ロームで密である。VはIV層に準じる。VI層は小中粒径の角礫層である。基質は褐色(10Y R4.5/6)で粘土質ロームの土性を示す。本層は、当遺跡の立地する山麓斜面の原面を形成している。

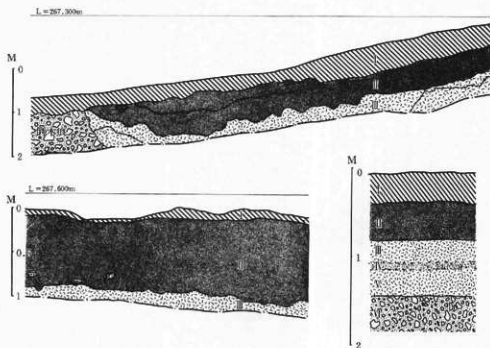


図3 土層断面

### III 調査の方法

#### (調査区の設定) (図5)

上八木田遺跡群の調査に際して、公共座標第X系に平行して設定された調査区を踏襲している。すなわち、第X系座標値 $X = -33,000,000m$   $Y = 33,000,000m$ におかれた調査区原点を基点として、東方および南方へ1辺50mの大調査区、1辺5mの小調査区を設定し、大調査区に対しては、東へ向ってローマ数字を、南へ向って大文字アルファベットを順に与え、両者を組合わせ例えばIA大調査区、IIB大調査区の名称を、また、小調査区に対しては、各大調査区内で東へ向いアラビア数字を1~9・0まで、南へ向い小文字アルファベットをa~jまで順に与え、両者を組合わせ、さらに大調査区名を前に付して、例えばIA1a小調査区、IIB2b小調査区の名称を与えている。

したがって、上八木田II遺跡には9つの大調査区が関わり、調査区測定に際して定められた2つの基準点と4つの測点が含まれている。これらの基準点、測点の座標値(X、Y)、標高(H)は次のとおりである。

基準点11  $X = -34,200.000m$   $Y = +33,250.000m$   $H = 260.602m$

基準点12  $X = -34,250.000m$   $Y = +33,250.000m$   $H = 262.524m$

測点38  $X = -34,300.000m$   $Y = +33,200.000m$

測点39  $X = -34,250.000m$   $Y = +33,200.000m$

測点40  $X = -34,250.000m$   $Y = +33,225.000m$

測点41  $X = -34,225.000m$   $Y = +33,225.000m$

#### (遺構の名称・精査の方法)

遺構は、その位置する小調査区名と遺構種類名を組合せ、たとえばIA1a住居跡のように呼ぶ。精査の方法は、住居跡については四分法、その他の遺構については二分法によった。

#### (図・図版)

図の縮尺は、図に明示している。図版の縮尺は、遺物については図版に明示し、遺構その他については不定である。土師器類の実測図の表現法は、図4に示した凡例に従っている。

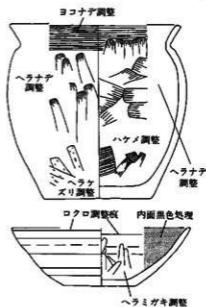


図4 土師器実測凡例

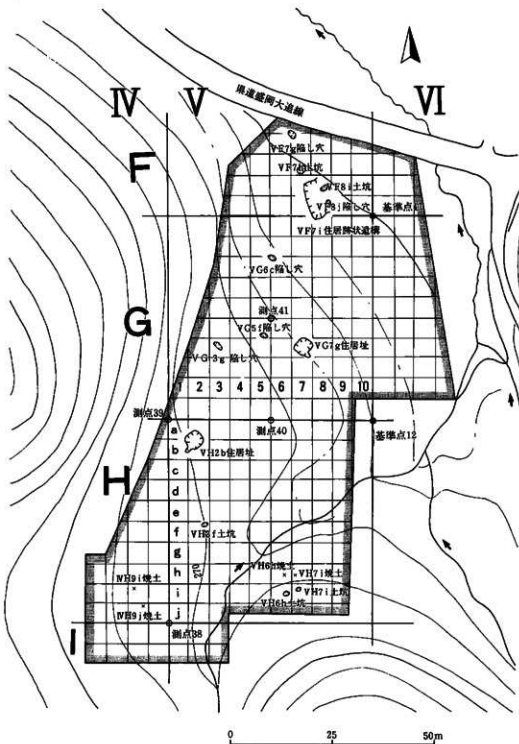


図5 調査区および遺構の配置

## IV. 遺構と遺物

検出された遺構は、古代の竪穴住居跡2棟、近世以降の住居跡状遺構1棟、陥し穴状遺構5基、土坑5基、焼土遺構4基である。遺構外出土遺物は、縄文時代土器をすべてとする土器片が遺物収納中コンテナ2箱、石器類が28点である。これらについて、順次記述する。

### (1) 竪穴住居跡

#### VG7g住居跡(図6、図版3~5)

本住居跡は、VG7g、VG8g、VG7f、VG8fの4つの調査区にまたがって位置するが、大半はVG7g調査区にある。重機による土層除去の際に、カマド部と思われる板状角礫と灰白色火山灰が点在し縁どる方形の平面形が現れたことにより検出された。検出面はII層上部である。

平面形は長方形で、長辺約430cm、短辺約360cmである。壁は約60°の傾きを有し、本住居跡の占地在傾斜地であることから壁高は一定せず、山側で約40cm、谷側で約20cmである。床は、深さ20cm前後に掘り込まれた掘方を褐色土(10YR3/4)の塊を含んだ黒色土(7.5YR2/1)で埋めもどして造られている。麻面上には炭化材が散在する。これは焼失に伴うものであろう。大部分の機種はクリで、ケヤキが少数混じる。炭化材上、周囲には軟質の焼成土が分布する。

埋土は黒色土(10YR2/1)を主体とし、その中に灰白色のテフラがスポット状に認められる。テフラは壁へ向って斜に上がるように入っている。このテフラは、分析の結果、十和田a火山灰と同定されている(付編参照)。

カマドは、南東壁の南寄りに位置し、長軸はN45°Wの方向を向く。本体部は複数の粘板岩を使って構築されているが、検出時、重機に攪乱されたため、それらの組方は、はっきりしない。燃焼部は幅45cm、奥35cmで楕円形状に広がり、最大厚7cmである。赤褐色(5YR4/6)に焼成されよく締って固い。煙道部は、長さ130cm、幅30cm、深さ20cmの規模でほぼ水平にのび、長径70cm、短径60cmの楕円形状の平面形を呈する煙出部へつづく。煙出部は50cmの深さを有し、煙道部より一段深い。

カマドをはさんで土坑がある。右側のもの(土坑1)は、上端径75cm、下端径65cm、深さ30cmの深皿状を呈する。底面には炭化材がのり、埋土は黒色土を主とする。左側のもの(土坑2)は、径45cm、深さ40cmの円筒状を呈し、その埋土は上部が黒色土、下部が黒色土と褐色土の混土からなる。

本住居跡の時代は、下記する遺物の特徴から、10C頃(平安時代)と推定される。

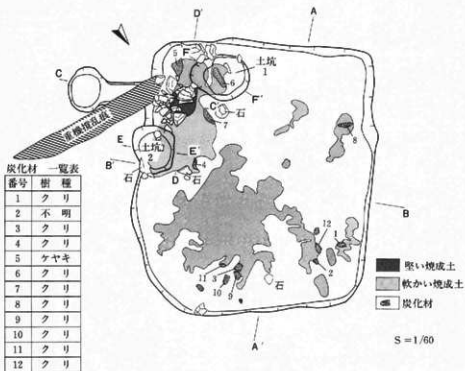
#### 〈遺物〉

本住居跡からは、ロクロ不使用の甕、ロクロ使用の甕、ロクロ使用の坏が出土している。図7-1（図版5-6）はロクロ不使用の甕である。頸部は軽微に括れ、口縁部で緩かに外反する。体部は最大径を中位にもち、底部へ向って窄む。底面は平である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整される。不明瞭なヘラナデ調整痕が内外面に認められる。図7-2（図版5-4）は、ロクロ不使用の小型の甕である。体部は内湾気味に立上がり、頸部で括れ、口縁部で外反する。最大径は体部上位にあり、底は平である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整される。体部外面はヘラナデ調整、同内面はヘラナデ後ヘラケズリ調整が施されている。図7-3（図版5-8）は、ロクロ使用の甕の下半部である。底は平で磨かれた痕跡を残す。体部外面にはロクロ調整による数条の溝があり、同内面はヘラナデ調整が施されている。図7-4（図版5-3）もロクロ使用の甕の下半部である。内面にはロクロ調整痕が残る。外面は、ロクロ調整のあと縦方向にヘラケズリ調整が施されている。底は平である。図8-1 a・b（図版5-5・7）は、接合はしないが同一個体に由来すると思われるロクロ不使用の甕の体部片と底部片である。体部は底部へ向い軽微に窄み、内外面ともにヘラナデ後ヘラケズリ調整が施されている。底は平で木葉痕を残す。図8-2（図版4-1）はロクロ使用の坏である。調整が不良なためか器形はいびつにゆがんでいる。底には回転糸切痕が残り、ヘラにより再調整が施されている。図8-3（図版4-3）は、ロクロ使用の坏の破片である。底には回転糸切痕が残り、体部は内湾気味に外傾する。図8-4（図版4-2）は、ロクロ使用の坏である。体部は中ほど軽微に括れて内湾気味に外傾する。内面は黒色処理されヘラミガキ調整が施されている。底には回転糸切痕が残る。図7-5（図版5-1）は、ロクロ使用の坏である。体部は内湾気味に外傾し、口縁部で軽微に外反する。底には回転糸切痕を残す。図8-6（図版5-2）は、ロクロ使用の坏の口縁部片である。図8-7（図版4-4）は、ロクロ使用の坏の体部下半部片である。外面には、ヘラナデ後ヘラケズリ調整が施されている。図8-8（図版4-5）は、ロクロ使用の坏の口縁部片である。内面は黒色処理が施されている。

#### VH2b住居跡（図9、図版6-8）

本住居跡は、VH2b、VH2a、VH1b、VH1aの4つの調査区にまたがって位置している。試掘調査で検出されていたもので、その際、重機により壁、カマド、床の一部が破壊された。本調査の際、残存部について被覆土を少しずつ除去していったところ、II層上部で点在する灰白色テフラが現れ、それが方形と推定される形で描くことが判明した。埋土観察用のベルトを地形の最大傾斜の向きと、これに直角の方向に設定して精査を進めた。

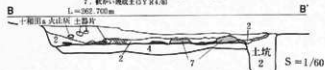
本住居跡の平面形は、一辺約400cmのほぼ正方形を呈する。壁はほぼ60°で傾き、山側で約40



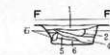
- 十和田市 大山炭
1. 褐色土(10Y R2/1), 炭化物を含む。S:L
  2. 褐色土(10Y R2/1), 焼成土粒(5Y R4/6)を含む。S:L
  3. 2.に黄褐色土(10Y R2/1), CL
  4. 黄褐色土(10Y R5/5)のブロック
  5. 炭化物を含む赤褐色土(7.5Y R3/4), 褐色土(5Y R2/1)のブロックを含む
  6. 炭化物を含む赤褐色土(7.5Y R3/4)
  7. 軟かい焼成土(5Y R4/6)



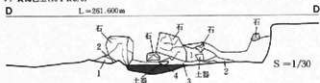
1. 褐色土(10Y R1.85/1)しまりがなく土性S:L, 暗褐色土(10Y R3/4)砂子混じる
2. 暗褐色土(10Y R3/4)
3. 暗褐色土(5Y R3/4)
4. 焼成土, 赤褐色土(2.5-5Y R4/6), 密で土性はCL



1. 褐色土(7.5Y R1.7/1)と黄褐色土(10Y R5/6)の混土。ややしまり。土性はCL
2. 褐色土(7.5Y R1.7/1)ややしまり土性はCL
3. 黒褐色土(7.5Y R2/3)
4. 黄褐色土(10Y R5/6)
5. 褐色土(7.5Y R1.7/1)縁で土性はCL
6. 褐色土(7.5Y R4/6)縁で炭化物を含む
7. 焼成土, 暗赤褐色(5Y R3/6)粉
8. 褐色土(7.5Y R1.7/1)に焼成土(5Y R3/4)を含む

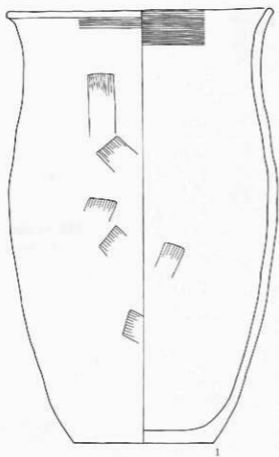


1. 褐色土(10Y R2/1), 褐色土(10Y R4/6)の境が混じる
2. 褐色土(10Y R2/1)と褐色土(10Y R4/6)の混土
3. 2よりややしまりがある
4. 褐色土(10Y R1.7/1)で暗褐色土(10Y R3/4)のブロックを含む
5. 黒褐色土(10Y R2/2)粉めて縁
6. 褐色土(10Y R4/6)粉めて縁



1. 褐色土(7.5Y R2/1)縁で土性はS:L
2. 暗褐色土(7.5Y R3/3)縁で土性はS:L
3. 褐色土(7.5Y R4/6)と褐色土(7.5Y R2/1)の混土, 縁で土性はS:L
4. 褐色土(7.5Y R4/6)土性はCL

図6 VG7g住居跡



1



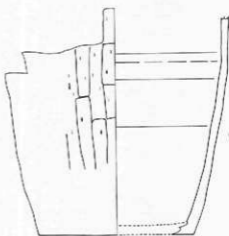
反転実面

3



反転実面

2

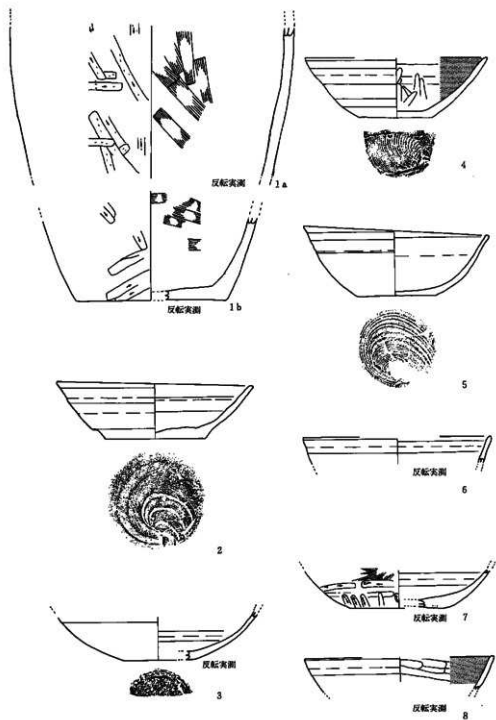


反転実面

4

縮尺1/3

图7 VG7g住居跡出土遺物(1)



縮尺1/3

图8 VG7g住居跡出土遺物(2)



cm、谷側で約15cmの高さを有す。床は、深さ15~20cmの掘り方を褐色土(10Y R3/4)のブロックを含む黒色土(10Y R2/1)で埋め、固めてつくられている。柱穴はみとめられない。床面上には炭化材が散在し、それを覆うように軟質の焼成土(5 Y R4/6)が分布する。これらは住居焼失に伴うものと推定される。炭化材の樹種は、クリとケヤキである。

埋土は、黒色土(10Y R1.85/1)を主体とし、この中に灰白色のテフラが点在する。テフラは、壁へ向って斜上する。分析の結果、このテフラは、十和田a火山灰と同定された(付編参照)。

カマドは、南西壁の南寄りにあり、その長軸はN45°Eの方向を向く。本体部は試掘の際の重機により攪乱されていて、構造をすることができないが、粘板岩を心材として構築されていたようである。燃焼部は、40×70cmの範囲に楕円形状に広がり、赤褐色(5 Y R4/6)を呈する。厚さは最大10cmで、固く締まる。煙道部は掘り込み式の構造で55cmの幅をもち煙道部へ向って上り傾斜する。煙出し部は平坦な底を有し、煙道部との間に段はない。煙道部には固く締まった赤褐色(5 Y R4/6)の焼成土が残在し、検出時、煙出し部、煙道部を覆って同様な焼成土が分布していた。

カマドの左側に、楕円形状の平面形を示す土坑がある。深さは約40cm、黒色土が埋土の主体である。

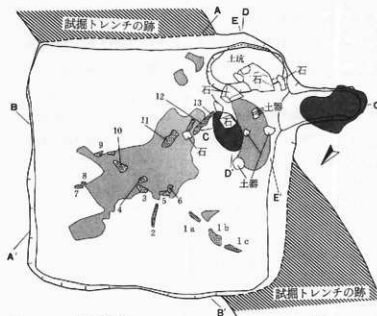
本住居跡の時期は、下記する出土遺物の特徴から10C頃(平安時代)と推定される。

#### 〈遺物〉

出土遺物は、甕と坏である。甕はロクロ使用のものと不使用のものがあり、坏はすべてロクロ使用のものである。

図10-1(図版8-5)は、ロクロ不使用の甕の体部下半部片である。外面はヘラケズリ調整、内面はハケメ調整が施されている。図10-2 a・b(図版8-1・4)は、接合しないが同一個体由来の破片である。ロクロは使用していない。頸部は括れ、口縁部は外反する。最大径は体部中位にあり、底部へ向って内傾し窄む。底は平である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整され、体部は、内外面がハケメ、外面がヘラナデ後ケズリ調整されている。図10-3(図版7-2)は、ロクロ使用の小形の甕である。最大径は体部上位にあり、頸部は括れ、口縁部で外傾して口唇部は角ばる。体部は下方へ向って窄み、底部で直立気味となる。底面には、回転糸切痕が残る。図10-4(図版7-4)は、ロクロ不使用の小形の甕である。体部は内湾気味に立上がり、頸部は軽微に括れ、口縁部で外反する。底面は平で木葉痕を残す。口縁部は内外面ともヨコナデが施され、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整されている。図11-1(図版8-2)は、ロクロ不使用の甕の体部上半部片である。頸部は括れ、口縁部は外反する器形である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整され、体部は内面がヘラナデ、外面がヘラ

ナデ後ヘラケズリ調整が施されている。図11-2（図版8-3）は、ロクロ不使用の甕の破片である。頸部は括れ、口縁部で外反する。口縁部は内外面ともヨコナデ調整され、体部内面はヘラナデ、同外面はヘラケズリ調整が施されている。図11-3（図版8-6）は、ロクロ不使用の甕の体部片である。内外面とも化粧塗り後ヘラナデ調整が施されている。図11-4（図版7-3）は、ロクロ使用の坏である。体部は内湾気味に外傾し、口縁部は外反する。底面には回転糸切痕が残る。図11-5 a～d（図版7-1）は、甕の破片である。口縁部は狭く直立気味に外反する。体部は外面には叩目痕を有する。



炭化材一覧表

番号	樹種	番号	樹種
1a	クリ	7	ケヤキ
1b	ケヤキ	8	ケヤキ
1c	クリ	9	ケヤキ
2	ケヤキ	10	ケヤキ
3	ケヤキ	11	クリ
4	ケヤキ	12	クリ
5	ケヤキ	13	クリ
6	ケヤキ		

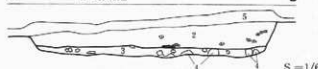
- 堅い焼成土
- 軟かい焼成土
- 炭化材

A L=265.900m A'



1. 試掘トレンチの埋土
2. 黒色土(10Y R1.35/1)土性はS:L, ややしまり火山灰ブロックを含む
3. 黒色の埋土, 黒色土(10Y R2/1)を基質にし暗褐色土(10Y R3/4)のブロックを含む, 土性はS:L~CL
4. 暗褐色土(10Y R3/4), 土性はCL

B L=265.000m B'



C L=265.000m C'

1. 黒色土(10Y R1.7/1), 土性はS:L, 火山灰小塊を含む
2. 黒色土(7.5Y R2/1)と暗褐色土(7.5Y R4/6)の混土
3. 赤褐色土(5Y R3/6), 密, 焼成を受けている
4. 暗褐色土(7.5Y R2/1), 土性はS:L
5. 赤褐色土(7.5Y R4/6), 密, カップ状に凸凹表面の焼成土
6. 暗褐色土(7.5Y R4/6)
7. 暗褐色土(7.5Y R1.85/1)と赤褐色土(5Y R4/6)の混土
8. 暗褐色土(7.5Y R3/4), しまりがいい, 密, フロース状
9. 暗褐色土(7.5Y R3/4), しまりがいい, 密, フロース状
10. 暗褐色土(7.5Y R4/6)の混土
11. 暗褐色土(7.5Y R4/6)の混土
12. 暗褐色土(7.5Y R4/6)の混土
13. 暗褐色土(7.5Y R4/6)の混土

D L=265.700m D'



1. 黒色土(10Y R1.7/1), 硬で土性はS:L
2. 暗褐色土(5Y R3/6)粘土
3. 暗褐色土(10Y R3/2)粘土

E L=265.700m E'



1. 暗褐色土(7.5Y R5/6), 土性はS:L, 密で焼成を受けている
2. 黒色土(10Y R1.7/1), 土性はS:L
3. 密く焼成を受けている, 赤褐色土(7.5Y R4/6), 密
4. 黒色土(7.5Y R2/1)と暗褐色土(7.5Y R5/6)の混土

S=1/30

図9 VH2b住居跡

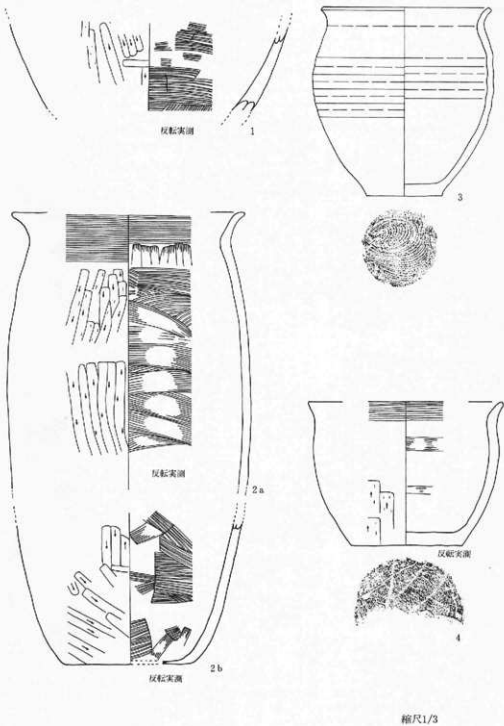
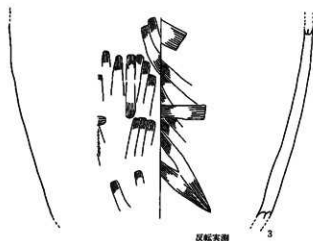
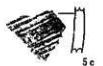
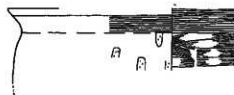
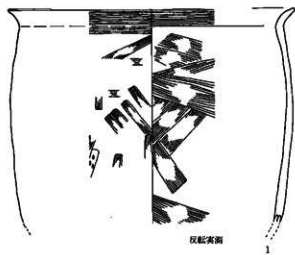


图10 VH2b住居跡出土遺物(1)



縮尺1/3

图11 VH2b住居跡出土遺物(2)

## (2)住居跡状遺構

### VF7 i 住居跡状遺構 (図12、図版9)

本遺構は、VF7 i、VF8 i、VF7 j、VF8 j、VG8 aの四つの調査区にまたがって位置する。斜面山側で歪んだ「かすがい」状に壁がめぐるが、斜面谷側へは続かない。したがって、壁は谷側へ開いている。向い合う壁の距離は8 m程で、壁高は最大25cmである。壁は外傾して立上がり、壁の内側にそって深さ約8 cm、幅15cm程の溝が部分的に構築されている。床面には不整形の土坑(160×8 cm、深さ20cm)が検出されたが、柱穴は認められない。埋土は黒色土(10Y R2/1)を主体とし明瞭な堆積構造を認めることができない。土坑、溝の埋土についても同様である。

本遺構の時期は、床面直上から煙管の吸口が出土していることから近世以降と推定される。

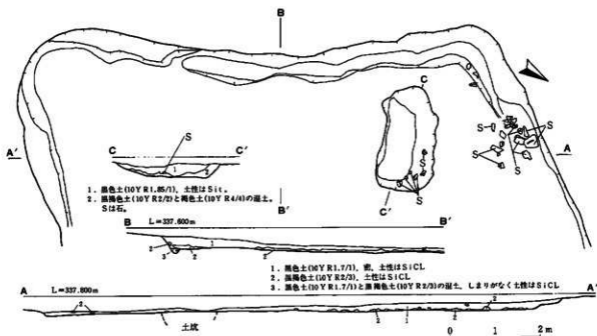


図12 VF7 i住居跡状遺構

### (3)陥し穴状遺構

#### VF 8 j 陥し穴状遺構 (図13-a、図版10)

本遺構はVF 8 j 調査区に位置する。検出面はIII層上面である。開口部平面形は小判形あるいはまゆ形を呈し、縦幅は210cm、横幅は90cmである。底部で幅が狭ばまり縦幅が170cm、横幅が30cm程となる。底面は中央部がやや浅く凸面状を呈し、深さは90~100cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、横断面はV字形あるいはU字形を示す。長軸は、N28°Wの方向を向く。

埋土は、上中部が締りのないシルト質ロームの黒色土(10Y R1.7/1)を主体とし、下部が層状に埋積する褐色土(10Y R5/4)、黒色土(10Y R2/1)、黒褐色土(10Y R2/2)からなる。遺物は出土していない。

#### VF 7 g 陥し穴状遺構 (図13-d、図版10)

本遺構はVF 7 g、VF 6 g、VF 7 f、VF 6 fの四つの調査区にまたがって位置する。検出面はIII層上面である。開口部平面形は小判形あるいはまゆ形を呈し、縦幅220cm、横幅は140cmである。底部で幅が狭ばまり縦幅170cm、横幅60cmとなる。底面はほぼ平坦で、深さは120cmである。壁は外傾して立ち上がり、横断面はV字形を示す。長軸は、N45°Wの方向を向く。

埋土は、上部がシルト質ロームの褐色土(10Y R3/3)と黒色土(10Y R1.7/1)の混土、下部が締りのない粘土質ロームの褐色土(7.5Y R5/1)からなり、それらの間には、黒色土、褐色土の薄層がレンズ状に介在する。また、埋土上部には灰白色のテフラが認められる。このテフラは分析の結果、十和田a火山灰と同定された(付編参照)。遺物は出土していない。

#### VG 5 f 陥し穴状遺構 (図13-b、図版11)

本遺構は、VG 5 f 調査区に位置する。検出面はIII層上面である。開口部はまゆ形ないし隅丸長方形を呈し、縦幅は210cm、横幅は80cmである。底部で幅が狭ばまり、縦幅が170cm、横幅が30cmとなる。底面は、地形の傾斜方向へ傾き下がり中央部に段をもつ。深さは、90cmである。横断面形は、Y字状あるいはロート状を示す。長軸はN80°Wの方向を向く。

埋土は、上部がシルト質ロームの黒色土(7.5Y R1.7/1)、下部が褐色土(7.5Y R3/4)の小塊が混じる極めて締りのない黒色土(7.5Y R1.7/1)であり、間には黒色土と褐色土の混土の薄層が介在する。埋土上部には灰白色のテフラが認められる。これは、十和田a火山灰と同定された(付編参照)。遺物は出土していない。

#### VG 6 c 陥し穴状遺構 (図13-c、図版12)

本遺構は、VG 6 c、VG 5 c、VG 6 b、VG 5 bの四つの調査区にまたがって位置する。検出面はIII層上面である。開口部平面形は、小判形ないしまゆ形を呈し、縦幅は200cm、横幅は80cmである。底部で幅が狭ばまり、縦幅170cm、横幅50cmとなる。底部は地形の傾斜の方向へ微

かに傾き下がり、ほぼ中央部のひだ状の高まりで二分される。深さは80~90cmである。横断面はV字状を示す。長軸はN75°Wの方向を向く。

埋土は、シルト質ロームの黒色土(7.5Y R2/1)を主体とする。最下部は、締りのないシルト質ロームの黒色土(10Y R2/1)と暗褐色土(10Y R3/4)が層状に重なり、最上部には、灰白色のテフラが認められる。このテフラは、十和田a火山灰と同定された(付編参照)。遺物は出土していない。

#### VG3g陥し穴状遺構(図14-a、図版11)

本遺構は、VG3g調査区に位置する。検出面はⅢ層上面である。開口部平面形は長楕円状を呈し、縦幅は380cm、横幅は75cmである。底部で横幅が狭ばまり30cmとなる。縦幅はほとんど変わらない。底面は、地形の傾斜の向きに傾き下がる。深さは70cmである。横断面形はV字状を呈する。長軸はN55°Wの方向を向く。

埋土は、上部がシルト質ロームの黒色土(7.5Y R1.7/1)、下部が粘土質ロームの黒色土(7.5Y R2/2)である。遺物は出土していない。

### (4)土坑

#### VH2f土坑(図15-e、図版12)

本遺構は、VH2f調査区に位置する。検出面はⅢ層上面である。開口部平面形は小判形を呈し、長軸長が200cm、短軸長が70cmである。深さは30cmで、全体としては浅皿の形状に似ている。

埋土は、粘土質ロームの黒色土(10Y R1.85/1)を主体とし、最上部には灰白色のテフラがブロック状に入っている。このテフラは分析の結果、十和田a火山灰と同定された(付編参照)。遺物は出土していない。

#### VH6i土坑(図14-e、図版13)

本遺構は、VH6i調査区に位置する。検出面はⅢ層上面である。開口部平面形は、径100cmのほぼ円形を呈する。深さは20cmで、全体としては浅皿の形状に似ている。

埋土は、シルト質ロームの黒色土(10Y R2/1)と褐色土(10Y R4/4)の混土、粘土質ロームの褐色土(10Y R4/4)と黄褐色土(10Y R5/6)の混土からなる。遺物は出土していない。

#### VH7i土坑(図14-d、図版12)

本遺物は、VH7i調査区に位置する。検出面はⅢ層上面である。開口部平面形は楕円形を呈し、長軸長150cm、短軸長100cmである。深さは35cmで、壁が明瞭な傾斜変換点をへずに底面へ続くので、凹面鏡状の断面を示す。

埋土は、シルト質ロームの黒色土(10Y R1.85/1)と粘土質ロームの黒色土と褐色土(10Y R



4/4) の混土からなる。遺物は出土していない。

#### VF8i土坑 (図14-c、図版13)

本遺構は、VF8i調査区に位置する。検出面はIII層上面である。開口部平面形は径110cmのほぼ円形を呈する。深さは60cmである。壁が半ばで張り出し、そこから底部へ向ってオーバーハングするために、フラスコ状の断面を示す。底部は平坦である。

埋土は、上部がシルト質ロームの黒色土 (10YR1.7/1)、下部が粘土質ロームの褐色土 (10YR3.5/4) で、全体に締って硬い。遺物は出土していない。

#### VF7h土坑 (図14-a、図版13)

本遺構は、VF7h調査区に位置する。開口部平面形は、径130cmのほぼ円形を呈する。深さは110cmである。壁が上部で張り出すために、フラスコ状の断面を示す。底面は凹面鏡状である。

埋土は、上部がシルト質ロームの黒色土 (10YR1.7/1)、下部が締りのない黒色土 (10YR1.7/1) と褐色土 (10YR4/4、3/3) からなる。遺物は出土していない。

### (5)焼土遺構

#### VH6h焼土 (図15-c、図版14)

本遺構は、VH6h調査区に位置する。検出面はII層上面である。4×50cmの範囲の土が焼成を受け赤褐色 (5YR4/6) を呈する。焼成の厚さは5cmである。石組などの構造物や遺物を伴わない。

#### VH7h焼土 (図15-d、図版14)

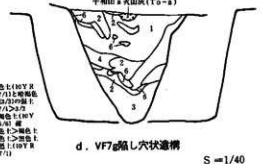
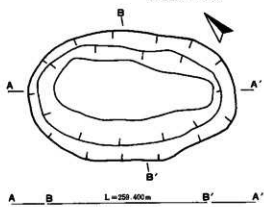
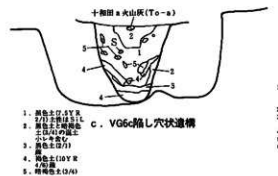
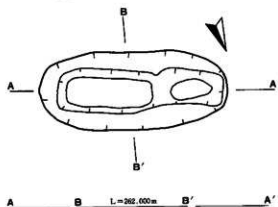
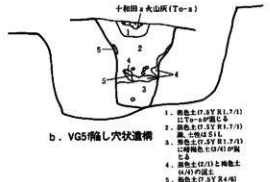
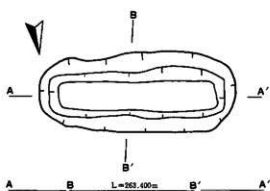
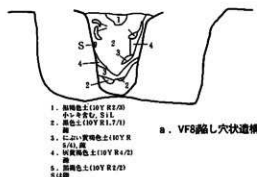
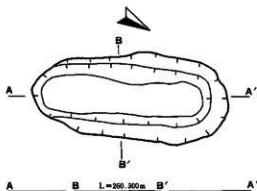
本遺物は、VH7h調査区に位置する。検出面はII層上面である。長さ200cm、幅40cmの範囲に赤褐色 (5YR4/6) を呈する焼成が点在する。焼成土の厚さは4~10cmである。石組などの構造物や遺物は伴わない。

#### IVH9i焼土 (図15-b、図版14)

本遺物は、IVH9i調査区に位置する。検出面はII層上面である。55×40cmの範囲の土が焼成を受け赤褐色 (5YR4/6) を呈する。焼成土の厚さは10cmである。石組などの構造物や遺物は伴わない。

#### IVH9i焼土 (図15-a、図版14)

本遺構は、IVH9i調査区に位置する。検出面はII層上面である。40×45cmの範囲の土が焼成を受け赤褐色 (5YR4/6) を呈する。焼成土の厚さは1cmである。石組などの構造物や遺物は伴わない。



S=1/40

図13 陥し穴状遺構

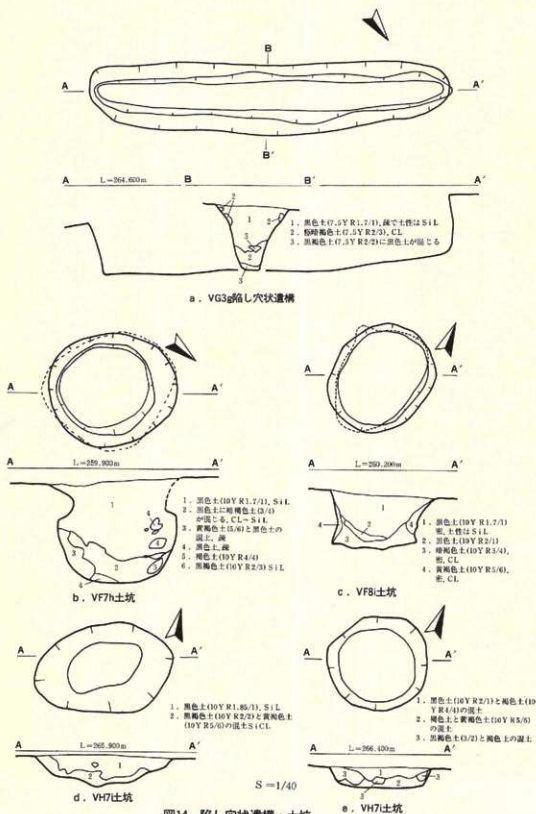
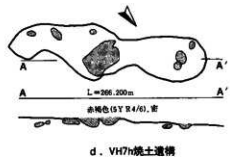
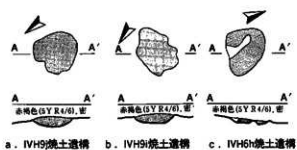


図14 陥し穴状遺構・土坑



S=1/40

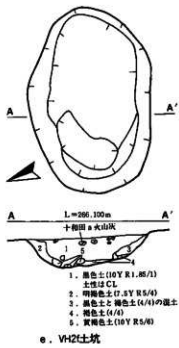


図15 土坑・焼土遺構

## (6)遺構外出土遺物

### A. 土器

遺構外出土器は、縄文土器だけで構成されている。帰属時代は、早期、前期、中期、晩期である。

#### 〈縄文時代早期〉

図16-1～5・図17-1～3（図版15-1～4・図版16-1～4）は、貝殻沈線文が施された土器片群で口縁部付近の1/2ほどが接合復元できたものである。体部上部は括れを有し、口縁部は内湾気味に外傾して6つ(?)の大きな突起が形成される。口唇部内側には貝殻腹縁による刺突列、また、口縁部の平行する沈線間や、沈線で三角形に区画された内部には貝殻腹縁圧痕文が施されている。胎土は細かく、焼成は良好で堅い。図17-4～8（図版16-5～9）も、貝殻沈線文が施された土器片群である。口唇部には山形に沈線が引かれ、器壁には直線状、山形状の沈線が施されている。平行する沈線の狭い間には貝殻腹縁圧痕文が、また、同沈線上には「サイコロの四つの目状」に棒状工具による刺突が施される。図17-10・11（図版17-1・2）は、貝殻腹縁圧痕が斜位に連続して施されている。沈線の集束部には、棒状工具による刺突がみられる。図17-9（図版17-4）は、貝殻腹縁圧痕が直線状あるいは曲線状に施された破片である。図18-1（図版17-3）は、口唇部に貝殻腹縁が連続して押圧され、器壁には沈線や貝殻腹縁圧痕文が施されている。図18-2（図版17-5）は、水平に引かれた沈線に斜位に接して短い貝殻腹縁圧痕が連続して施されている。図18-3～8（図版17-6～11）は、貝殻腹縁圧痕が縦方向に連続平行して施された土器片群である。図18-9～11（図版18-1～3）は、直沈線、山形沈線が引かれ、沈線にかこまれた区画内あるいは沈線の下位に貝殻腹縁による圧痕が斜位に施されている。器壁全体に貝殻腹縁によるとみられる条痕がみとめられる。胎土は細かく、焼成は良好で緻密で堅い。

#### 〈縄文時代前期〉

図19-1（図版18-4）は、粗製土器の体部破片である。器面全体にLRの横位回転圧痕が施されている。胎土には繊維が含まれている。図19-2・3（図版19-5）は、LRとRLの結束羽状が横位に施されている。胎土は繊維を含む。図19-4（図版19-4）は、きざみ目の施された突起を有する口縁部片である。器壁には末端処理されたRLの縄文が横位に回転押圧されている。胎土には繊維が含まれている。図19-5（図版18-5）は、外反する口縁部の破片である。LRの押圧痕が水平に4条めぐり、体部には縦に綾格文が施されている。胎土は粗くて焼成は良くない。図19-6（図版19-4）は、突起を有する口縁部片である。RLの押圧痕が水平に密に施されている。胎土には繊維が多量に含まれる。図20-1～3（図版19-1～

3) は、体部が外傾気味に立上がり口縁部で軽微に内湾する土器片である。L {R, L} の合摺の縄(?) で横位に回転施文され、2条で1単位の綾絡文が縦方向に平行して施されている。胎土は粗く、焼成は良くない。図20-4 (図版18-6) は、口縁部が外反して小波状を呈する。RLの回転圧痕が施され、頸部には粘土紐が波状に貼り付けられている。胎土は繊維を含む。大木5式に帰属可能であろうか。図6-6 (図版6-6) は、底部片で底面には木葉痕状が残る。器壁にはRLの回転圧痕が施されている。胎土には繊維が含まれている。

#### 〈縄文時代中期〉

図20-5~9 (図版20-1~5) は、円筒上層c式に帰属可能な土器破片群である。口縁部上端には半円状の窓があげられ、器壁には粘土紐が貼り付けられてその上にRの縄の押圧痕が施されている。また、半截竹管による刺突文が粘土紐のまわりを埋めている。図21-1 (図版20-7) は、口縁部に平行する沈線が3条水平に引かれ、その下位には2本単位の沈線がアーチ状に引かれている。体部にはLRの縄の回転圧痕が横位、縦位に施されている。中期初葉の土器であろう。図21-3 (図版20-9) は、口縁部に半截竹管文が連続施文された隆帯が水平にめぐる。体部にはRの縄による綾絡文が3本単位で縦方向に施され、その間はRLの回転圧痕が横位に施されている。円筒上層a式あたりに帰属可能であろう。図21-2 (図版20-12) は、LRの側面圧痕が2本水平に平行して施され、その間には同種の縄の圧痕がアーチ状に連続して縊がっている。地文はLRの横位回転圧痕文である。図21-4・5 (図版20-8・11) は、LRの側面圧痕が2条施された口縁部片である。LRの横位回転圧痕文を地文とする。図21-7 (図版20-10) は、口縁部にLRの側面圧痕が施され、体部にはLRの縄で横位回転圧痕文が施文されている。図22-5 (図版21-5)、図22-4 (図版21-7) は、いずれもLRの回転圧痕を施した後に曲沈線が引かれ、沈線でかこまれた区画内を磨消処理している土器片である。

#### 〈縄文時代晩期〉

図22-1 (図版21-6) は、大洞C<sub>2</sub>式に帰属される完形の皿形土器である。体部には変形雲形文が施され、その間を細かいLRの横位回転圧痕がうめる。口縁部には4つの小突起が形成され沈線が1本めぐる。口唇部外縁は連続するきざみ目が施されている。図22-3 (図版21-4) は、大洞C<sub>2</sub>式に帰属される土器片である。口唇部には連続するきざみ目が施され、口縁には沈線がめぐる。体部はRLの横位回転圧痕をもつ。図22-6 (図版21-3) は、大洞C<sub>2</sub>式に帰属される深鉢の破片である。口縁部には2本の沈線がめぐり、口唇部の小突起上端は棒状工具が押しつけられている。体部の回転圧痕は磨消し処理が施されている。図22-2 (図版21-1) は、沈線と細かいLRの横位回転圧痕が施された土器片である。胎土は細かく、焼成は良い。図22-7 (図版21-2) は、底部付近の破片で、細かいLRの回転圧痕が施されている。

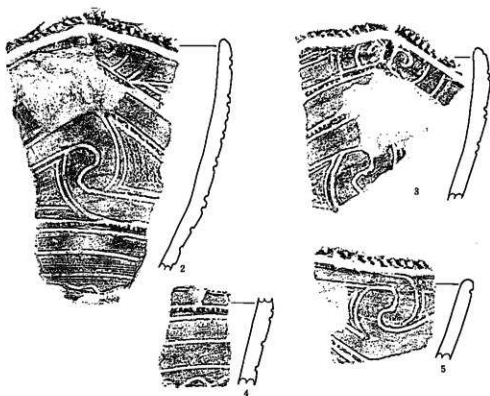
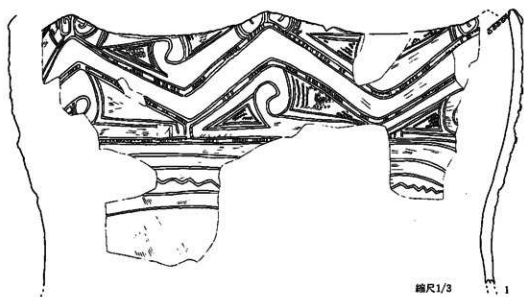
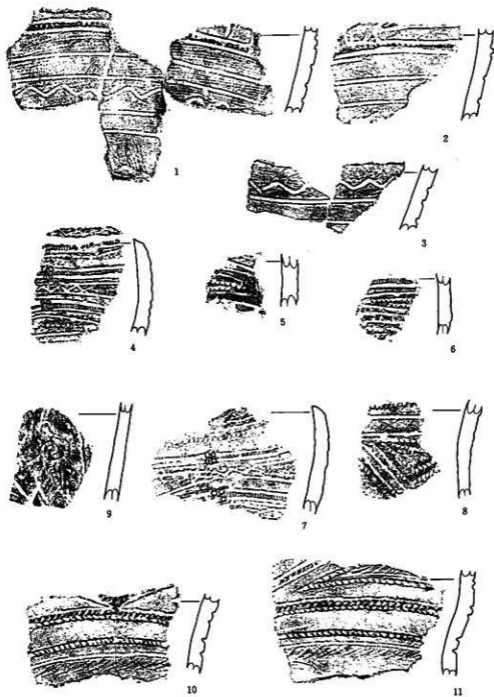


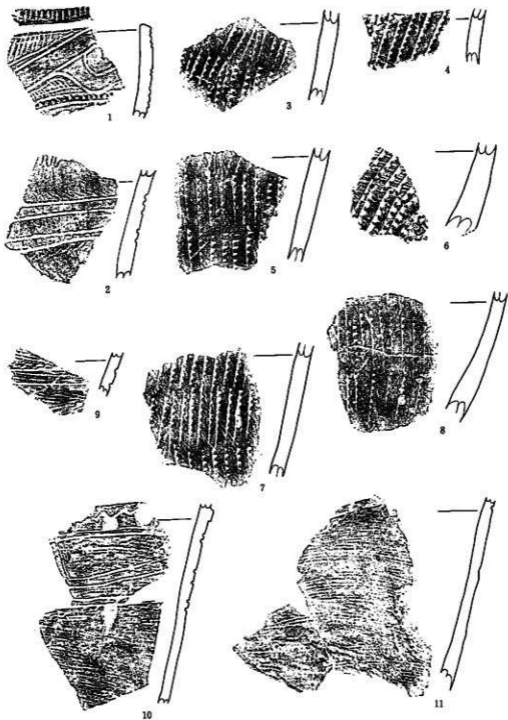
图16 遺構外出土遺物(土器 1)



縮尺1/2

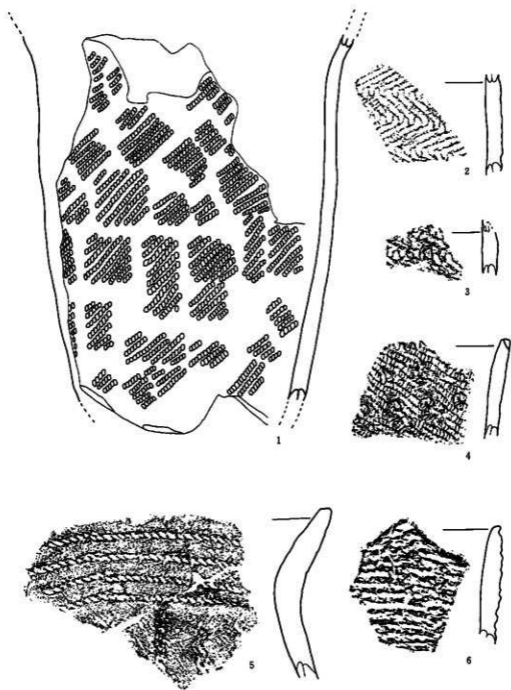
圖17 遺構外出土遺物(土器2)





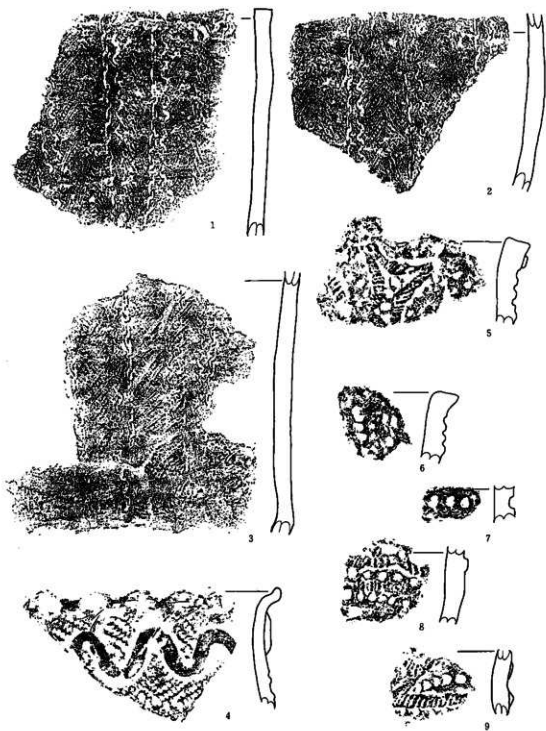
縮尺1/2

图18 遺構外出土遺物(土器 3)



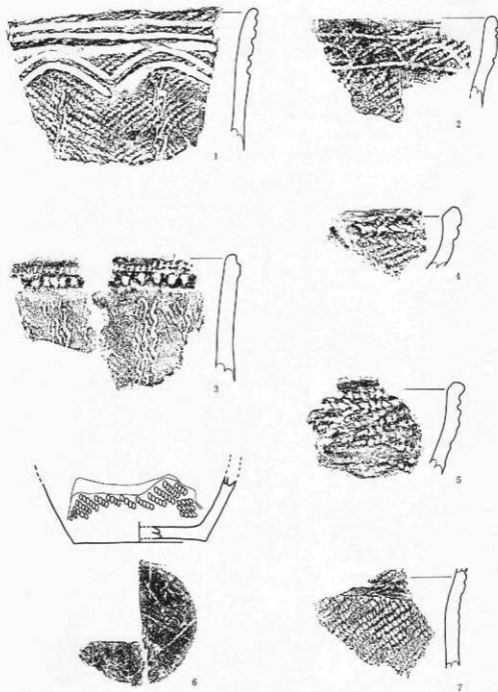
縮尺1/2

圖19 遺構外出土遺物(土器4)



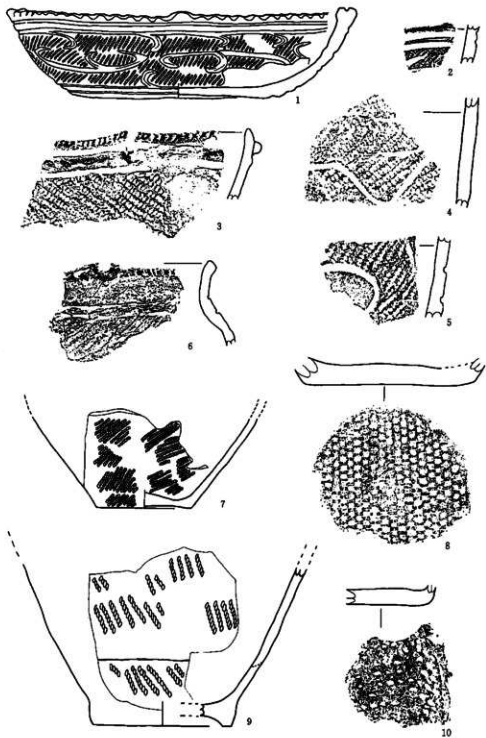
縮尺1/2

圖20 遺構外出土遺物(土器5)



縮尺1/2

图21 遺構外出土遺物(土器6)



縮尺1/2

图22 遺構外出土遺物(土器 7)

### 〈その他〉

図22-9 (図版21-9) は、RLの縦位回転圧痕が施された底部の破片である。底面は凹面状に窪む。図22-8 (図版21-10)、図22-10 (図版21-8) は、網代痕の残る底部片である。

## B. 石器・石製品

すべてII層から出土している。土器の出土状況、その時代構成からみて、これらの石器の大部分は縄文時代に帰属すると思われる。

図23-7 (図版22-5) は無茎で基部が平坦な石鏃である。ほぼ直線的な側縁を有し、その平面形は二等辺三角形状を呈する。図22-2 (図版23-2) は石匙である。横長で身部は台形状を呈する。図23-3 (図版22-3) は篋状を呈する剥片石器である。上端、下端にへこみがあり、側辺の刃部加工は粗い。図23-6 (図版22-7) は、いびつな半円形状の平面形を呈する剥片石器である。上辺部を除き、刃部加工が施されている。図23-1 (図版22-1) は平面形が隅丸三角形状を呈する剥片石器である。二辺に直線状と凹状の刃部が加工されている。図23-4 (図版22-4) は柳葉状の比較的細長い平面形を呈する剥片石器である。直線状と凸状の刃部を有し、先端部は欠損する。図23-12 (図版22-12)、図23-5 (図版22-5) は、いずれも粗い刃部加工が施された剥片石器である。図23-8 (図版22-11)、図23-9 (図版22-8)、図23-10 (図版22-13) は刃部加工がみられず単なる剥片と思われる。

図23-14 (図版22-14) は刃部を欠損する磨製石斧である。磨き調整は良好で光沢を有す。図24-2 (図版22-15) は基部を欠損する磨製石斧である。刃部は良く磨かれ、側縁に擦り痕、敲打痕が形成されている。図24-1 (図版23-1) も基部を欠く磨製石斧である。磨きの状態は悪く全体に粗雑である。図25-2 (図版23-2) は打製石斧である。扁平円礫の自然面を片面に残す。

図24-3 (図版24-5)、図26-1 (図版24-1)、図26-5 (図版24-4) は、円礫、偏平円礫の表裏二面に擦り面が形成された磨石である。このうち、図26-1、図26-5には敲打作用によるクボミ部が伴う。図24-4 (図版23-3)、図24-5 (図版24-6)、図25-1 (図版23-5)、図25-3 (図版24-3)、図26-2 (図版23-4)、図26-3 (図版23-7)、図26-4 (図版23-6)、図26-6 (図版24-2) は、棒状、三角柱状あるいは偏平状の円礫を用いた磨石である。面、側縁、稜に擦り痕、敲打痕が残されている。

図23-13 (図版22-10) は石製円盤である。径約3cm、厚さ約8cmの大きさを有している。

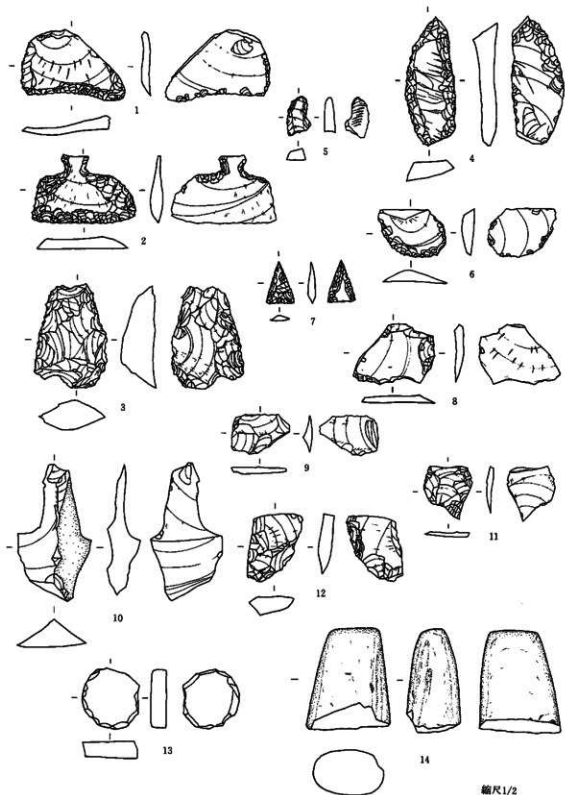
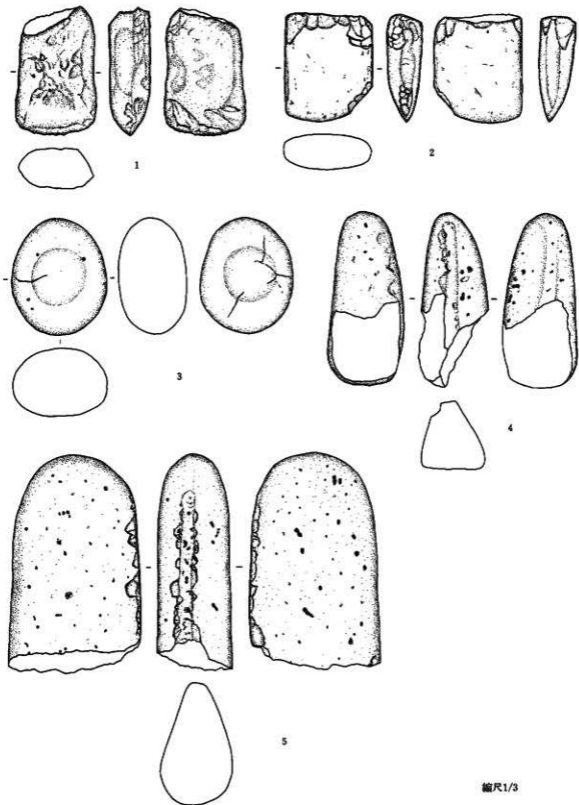


图23 漳浦外出土遺物(石器 1)

縮尺1/2



縮尺1/3

图24 遺構外出土遺物(石器 2)



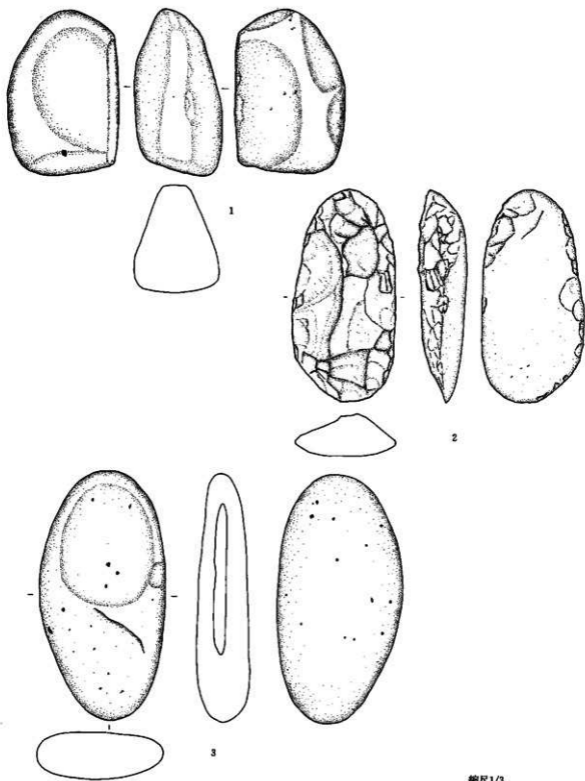
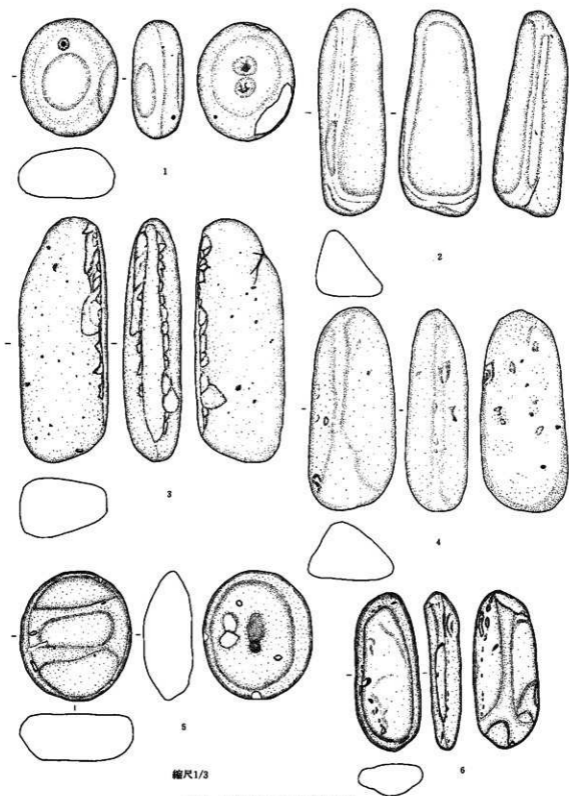


图25 濠沟外出土遗物(石器 3)

縮尺1/3



縮尺1/3

圖26 遺構外出土遺物(石器 4)

石器、石製品一覽表

整理 No	図No	図版No	器 種	出土区・層位	法 量(cm, g)				石質 (産地、地質系統)
					長さ	幅	厚さ	重量	
201	23-1	22-12	剃 片	VH 7 a 区 II層上部	3.1	4.5	0.4	6.4	珪質砂岩 (早石西部、新第三系中新統)
202	23-2	22-2	石 匙	VG 7 a 区	3.6	5.5	0.7	13.9	粘板岩(北上山地、古生界)
203	23-10	22-13	剃 片	VH 6 i 区 II層上部	7.2	3.9	1.6	22.6	珪質凝灰岩 (奥羽山地、新第三系中新統)
204	23-1	22-1	不定形石器	VIG 2 b 区	3.2	5.5	0.7	13.9	珪質砂岩 (早石西部、新第三系中新統)
205	23-4	22-4	不定形石器	VH 9 h 区 II層下部	6.7	2.6	1.3	22.5	珪質砂岩 (早石西部、新第三系中新統)
206	23-3	22-3	石 ベ ラ	VH 1 b 区 II層下部	5.4	3.8	1.7	36.2	粘板岩(北上山地、古生界)
207	23-12	22-11	不定形石器	VH 8 a 区 II層	3.6	2.9	0.9	10.8	粘板岩(北上山地、古生界)
208	23-5	22-6	不定形石器	VH 7 h 区 II層上部	2.0	1.2	0.6	1.75	粘板岩(北上山地、古生界)
209	23-9	22-8	剃 片	VH 2 b 区	2.1	3.1	0.4	2.2	粘板岩(北上山地、古生界)
210	23-13	22-10	石製円盤		3.2	3.1	0.9	13.6	珪質凝灰岩 (奥羽山地、新第三系中新統)
211	23-11	22-9	不定形石器	VH 8 i II層	2.8	2.5	0.3	2.1	粘板岩(北上山地、古生界)
212	23-6	22-7	不定形石器	IVG 3 d 区	2.4	3.6	0.6	6.6	粘板岩(北上山地、古生界)
213	23-7	22-5	石 鏃	VF 6 j 区 II層上部	2.2	1.4	0.4	0.7	粘板岩(北上山地、古生界)
214	24-1	23-1	磨製石斧	VH 9 i 区	10.1	6.4	3.3	390	凝灰質硬砂岩 (北上山地、古生界)
215	25-2	23-2	打製石斧	VH 8 a 区 II層	16.8	8.3	3.8	700	凝灰質硬砂岩 (北上山地、古生界)
216	24-4	23-3	磨 石	VH 1 b 区 II層下部	13.3	5.5	5.4	500	礫石安山岩 (奥羽山地、第四系)
217	26-2	23-4	磨 石	VH 8 a 区 II層上部	16.4	6.5	5.2	735	凝灰質硬砂岩 (北上山地、古生界)
218	26-3	23-7	磨 石	VH 16 区 II層下部	19.3	7.1	5.7	1050	礫石安山岩 (奥羽山地、第四系)
219	24-5	24-6	磨 石	VH 1 d 区 II層上部	17.2	6.0	9.8	1500	デイサイト質凝灰岩 (奥羽山地、新第三系中新統)
220	26-4	23-6	磨 石	VH 8 a 区 II層上部	16.1	6.9	5.0	780	礫石安山岩 (奥羽山地、第四系)
221	24-3	24-5	磨 石	VH 8 a 区 II層上部	9.2	7.6	5.3	540	礫石安山岩 (奥羽山地、第四系)
222	26-1	24-1	磨 石	VH 9 h 区 II層	9.2	7.6	3.9	450	凝灰質硬砂岩 (北上山地、古生界)
223	26-6	24-2	磨 石	VH 9 h 区 II層	12.6	5.2	2.6	270	凝灰質硬砂岩 (北上山地、古生界)
224	23-14	22-14	磨製石斧	VH 7 i 区 II層上部	5.3	4.4	2.5	140	綠色凝灰岩 (盛岡周辺西縁、古生界)
225	25-3	24-3	磨 石	VH 6 h 区 II層下部	19.8	9.9	3.8	1200	凝灰質硬砂岩 (北上山地、古生界)
226	26-5	24-4	磨 石	VH 5 i 区 II層下部	10.3	8.9	3.8	510	凝灰質硬砂岩 (北上山地、古生界)
227	24-2	22-15	磨製石斧	VG 7 f 区 II層下部	8.1	7.0	2.8	345	綠色凝灰岩 (盛岡周辺西縁、古生界)
228	25-1	23-5	磨 石	VH 8 a 区 II層上部	13.2	7.0	8.5	1200	粘板岩(北上山地、古生界)

## V. まとめ

### (1)立地

上八木田Ⅱ遺跡は、中部北上山地の西縁の小起伏山地の最終氷期の寒冷気候下で形成されたと推定される岩屑堆積面に立地する。この堆積面は、褐色風化火山灰に被れその最上部には黒色腐植層が生成している。黒色腐植層の最下部あるいは直下には、レンズ状、スポット状に黄褐色を呈しシルト質ロームのテフラが介在することがある。これは安家火山灰（中野浮石）の可能性が高い。このことから、当地域における黒色腐植層の生成開始は、1万年前以降完新世に入ってからのことと推定される。

### (2)遺構

竪穴住居跡が2棟、住居跡状遺構が1棟、陥し穴状遺構が5基、土坑が5基、焼土遺構が4基検出された。

#### 〈竪穴住居跡〉

2棟とも古代の住居跡である。一方はほぼ正方形、他方は長方形の平面形を有している。いずれもカマドはコーナー寄りに設置され、煙道は掘込み式の構造を有する。また、多量の炭化材と軟質の焼成土を伴うことから焼失住居と推定される。埋土にはスポット状に十和田の火山灰が挟在する。いずれの住居からも壘と坏が出土しその構成は類似している。壘はロクロ使用のものと同使用のものが共存し、底部端が張り出すものはない。VH 2 b住居跡からは、たたき目のある壘の破片が出土している。坏はすべてロクロ使用で回転糸切痕を有している。一部の坏には黒色処理が施されている。これらの住居跡の時期は、遺物の構成から10C頃と推定される。この推定は、埋土にAC 915年の堆積年代が考えられている十和田a火山灰が挟在していることと矛盾しない。なお、2棟が同時存在したか否かを判断する手がかりは得られていない。

#### 〈陥し穴状遺構〉

5基のうち1基（VG 3 g 陥し穴）は長楕円形状の開口部を有する典型的な「溝状陥し穴」の形態を呈する。これは田村（1987）のA型に帰属される。他の4基は、開口部の平面形が小判形あるいはまゆ形を呈した底面中央部付近に凸部があつて前述のVG 4 g 陥し穴とは明らかに異なる形態を示す。これらは田村（1987）のB<sub>1</sub>型に帰属が可能であろう。いずれも、時期を判定できる遺物を出土していないが、既存資料にもとづけば、VG 4 g 陥し穴は縄文時代中期～後期と推定される。他の4基は、このうち3基の埋土上部に十和田a火山灰が伴うことから、その時期は少くとも十和田a火山灰の堆積前であると推定する。なお、田村（1987）は、B<sub>1</sub>型の時期は縄文時代晩期中葉～平安前期を考えている。

#### 〈その他の遺構〉

住居跡状遺構は、かすがい状にめぐる壁を有し、谷側へ開いた平面形を呈する。煙管の吹口が出土していることから近世以降の遺構と判断した。5基の土坑のうち2基は、フラスコ状の形態を呈するものである。既存の資料にもとづけば、何らかの貯蔵に用いられたものと推定される。他の3基は、浅い皿形の形状を呈するものである。このうち1基の埋土上部には十和田a火山灰が伴う。いずれの土坑からも時期を判断できる遺物の出土はない。焼土は、その産状から現地性のものと判断されるが、時期推定の材料となる遺物、構造物を伴わない。

#### (3)遺構外出土遺物

土器はすべて縄文土器で、それらは早期、前期、中期、晩期に帰属される。早期の貝殻沈線文系の土器片から口縁部付近1/2ほどが復元され、比較的良好な資料が得られたといえる。前期、中期では、大木式系、円筒式系の特徴をもつものが共伴し、両文化の接する地域の特性を反映している。石器は剥片石器、礫石器など計28点である。帰属時代は、出土土器の時代構成から考えて、多くが縄文時代に属するものと推定される。

## 岩手県、上八田Ⅱ遺跡のテフラ検出分析

古環境研究所

### 1. はじめに

東北地方北部には、岩手火山や十和田火山をはじめとして多くの第四紀火山が分布している。これらの火山は、過去に大量のテフラ（火山砕屑物）をその周辺に堆積させてきた。これらのテフラの中には、多くの年代測定や層位学的研究により、噴出年代が明らかにされたものがある。これらのテフラは「示標（しひょう）テフラ」と呼ばれ、地質学や地形学だけでなく考古学の分野でも時間の指標として盛んに利用されている。

上八木田Ⅱ遺跡の発掘調査においても、土層中にテフラの堆積が認められた。本報告は、発掘調査担当者より採取・送付された5点の試料について、テフラ検出分析を行い示標テフラとの同定を試みた結果について述べるものである。

### 2. 分析試料と方法

テフラ検出分析の対象とした試料は、遺構の覆土から採取された4点と、基本土層から採取された1点の、合計5点である。テフラ検出分析は、次の手順で行われた。

- (1) 試料5gを秤量。
- (2) 超音波洗浄装置により、泥分を除去。
- (3) 80°Cで恒温乾燥。
- (4) 実体顕微鏡と、偏光顕微鏡下で、テフラ粒子の特徴を観察。

### 3. 分析結果

#### 1) VF78陥し穴

テフラ検出分析の結果を、表1に示す。本試料には、火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスの形態は、スポンジ状または繊維束状に発泡した軽石型に富み、平板状のバブル型は比較的少ない。また、部厚い中間型も少量含まれる。大部分の火山ガラスの色調は透明または白色であるが、中間型の火山ガラスには褐色を呈するものが少量認められる。火山ガラスの最大径は、1.1mmである。重鉱物としては、斜方輝石がごく少量含まれている。

#### 2) VH2f土坑

表1. 上八木田II遺跡のテフラ検出分析結果

遺構	火山ガラス			
	量	形態	色計	最大径
V F 7 f 陥し穴	+++	pm>bw>md	透明>白>褐	1.1
VH2 f 土坑	+++	pm>bw>md	透明>白>褐	1.8
V G 5 f 陥し穴	+++	pm>bw>md	透明>白>褐	2.0
VH 2 b 住居跡	+++	pm>bw>md	透明>白>褐	1.3
基本土層	++++	pm>bw>md	透明>白>褐	0.7

++++:とくに多い, +++:多い, ++:中程度, +:少ない, pm:軽石型火山ガラス,  
bw:バブル型火山ガラス, 最大径の単位はmm.

本試料にも、火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスの形態は、スポンジ状または繊維束状に発泡した軽石型に富み、平板状のバブル型は比較的少ない。また、部厚い中間型も少量含まれる。大部分の火山ガラスの色調は透明または白色である。また中間型の火山ガラスに、褐色を呈するものが認められる。火山ガラスの最大径は、1.8mmである。重鉱物としては、斜方輝石および単斜輝石が少量認められる。

### 3) V G 5 f 陥し穴 (3)

本試料にも、火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスの形態は、スポンジ状または繊維束状に発泡した軽石型に富み、平板状のバブル型は比較的少ない。また、部厚い中間型も少量含まれる。大部分の火山ガラスの色調は透明または白色であるが、中間型の火山ガラスに褐色を呈するものが認められる。火山ガラスの最大径は、2.0mmである。重鉱物には、斜方輝石がごく少量含まれている。

### 4) V H 2 b 住居跡

本試料にも、火山ガラスが多く含まれている。火山ガラスの形態は、スポンジ状または繊維束状に発泡した軽石型に富み、平板状のバブル型は比較的少ない。また、部厚い中間型も少量

含まれる。大部分の火山ガラスの色調は透明または白色であるが、中間型の火山ガラスに褐色を呈するものが認められる。火山ガラスの最大径は、1.3mmである。重鉱物としては、単斜輝石がごく少量認められた。

#### 5) 基本土層

本試料には、火山ガラスがとくに多く含まれている。火山ガラスの形態は、スポンジ状または纖維束状に発泡した軽石型に富み、平板状のバブル型は比較的少ない。また、部厚い中間型も少量含まれる。大部分の火山ガラスの色調は透明または白色であるが、中間型の火山ガラスに褐色を呈するものが認められる。本試料に含まれる火山ガラスは前述の4試料と比較して明らかに細粒で、その最大径は0.7mmである。重鉱物には、単斜輝石がごく少量認められた。

以上のテフラ検出分析の結果、上八木田II遺跡には遺構覆土試料4点から検出されたテフラと、基本土層から検出されたテフラの合計2層のテフラが検出されたと考えられる。

#### 4. 考察

岩手県北部では、これまでに後期更新世後半以降の火山灰土中に4層の火山ガラスに富む示標テフラが検出されている。それらは、下位より始良 Tn 火山灰(AT)、十和田八戸テフラ(To-HP)、十和田中標テフラ(To-Cu)、十和田 a 火山灰(To-a)である。以下、各示標テフラの特徴を記載する。

##### (1) 始良 Tn 火山灰(AT)

約2.1—2.2万年前に南九州の始良カルデラから噴出した広域テフラである(町田・新井、1976)。南九州奄美諸島より東北地方津軽半島に至る広い範囲で検出されている。岩手県北部では、岩手火山東麓において、岩手一滝沢第1スコリア(Iw-T1、遠藤、1978、町田ほか、1984)の直下にある暗色帯の上部に検出されている(早田ほか、未公表資料)。このATは、透明の平板状に富むことで特徴づけられる。ATに含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.498—1.501である(町田・新井、1976)。

##### (2) 十和田八戸テフラ(To-HP)

約1.0—1.3万年前に十和田火山より噴出したテフラ(町田ほか、1984)で、岩手火山東麓において約1.6万年前に秋田駒ヶ岳火山から噴出した秋田駒一小岩井軽石(Ak-K、大上・土井、1978、町田ほか、1984)の下位に検出されている(土井・新井、1988)。本テフラは、軽石型火



山ガラスに富むことで特徴づけられる。また重鉱物には、斜方輝石、角閃石などが含まれている(町田ほか、1984)。

### (3) 十和田中帯テフラ (To—Cu)

約5,000～5,500年前に十和田火山より噴出したテフラである。岩手県東北部の多くの地点で検出されている「安家火山灰」と呼ばれたテフラ(菊池ほか、1981)は、このテフラに同定される(早田・八木、1992印刷中)。To—Cuは、軽石型、バブル型、中間型など多くの形態のガラスに富むことで特徴づけられる。含まれる火山ガラスの屈折率( $n$ )は、1.503—1.513である(早田・八木、1992印刷中)。

### (4) 十和田a火山灰

A.D.915年に十和田火山から噴出したテフラと考えられている(町田ほか、1981)。軽石型、バブル型、中間型など多くの形態のガラスに富むことで特徴づけられる。火山ガラスの屈折率( $n$ )は、1.508—1.517である。重鉱物としては、単斜輝石が含まれている(町田ほか、1984)

以上4層の示標テフラの特徴と、上八木田II遺跡において検出された2層のテフラの特徴を比較して考慮すると、遺構覆土で検出されたテフラはTo—aに同定されるものと思われる。また、基本土層(1)から検出されたテフラは、火山ガラスの特徴や黒色黒ボク土中にブロックとして散在していることなどから、To—Cuに同定される可能性が大きいものと思われる。

## 5. まとめ

上八木田II遺跡において採取されたテフラ試料についてテフラ検出分析を行った結果、2層のテフラが検出された。これらのテフラは、十和田中帯テフラ(To—Cu:約5,300年前)と十和田a火山灰(To—a: A.D.915年)に各々同定されるものと思われる。同定の精度を向上させるために、屈折率の測定が望まれる。またTo—aとTo—Cuについては、その運搬堆積様式など不明点が多い。一次堆積層の指標を明らかにする観点からも、テフラの層相を詳細に記載するために野外地質調査が行われることが期待される。

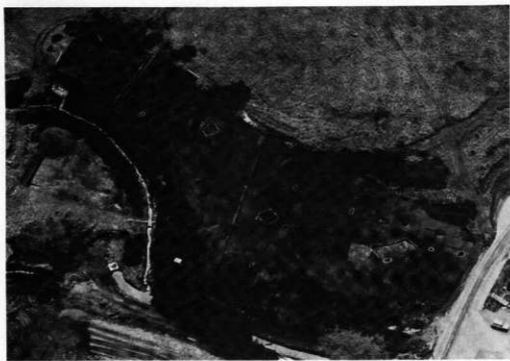
## 文 献

- 土井宣夫・新井房夫(1987)：岩手山麓に分布する十和田火山八戸テフラ。日本地質学会東北支部会報，  
no. 17, p.11-13.
- 遠藤良二(1977)：北上川上流部の化石周水河現象。日本地理学会予稿集，12, p.22-23.
- 菊池強一・檜垣大助・吉永秀一郎(1981)：北上山地東部に分布する縄文前期火山灰について。東北地  
理，33, p.57-58.
- 町田 洋・新井房夫(1976)：広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—。科学，46，  
p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広(1981)：日本海を渡ってきたテフラ。科学，51, p.562-569.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫(1984)：テフラと日本考古学—考古学研究と関  
係するテフラのカタログ—。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学  
と人文・自然科学」，p.865-928.
- 早田 勉・八木浩司(1992印刷中)：東北地方の第四紀テフロクロノロジー。第四紀研究。

# 写 真 图 版



遺跡付近の地形



遺跡全景

図版 1 遺跡全景・遺跡付近の地形



VH9i 区東壁



VH9h 区北壁



VH9j 区南壁

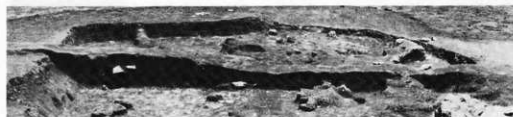


VH9C区Ⅲ層上面に  
検出された安家火山灰(矢印)

図版2 土層断面



全 景



埋 土



炭化材出土状況

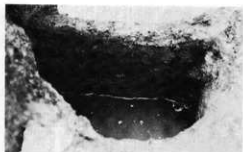


カマド

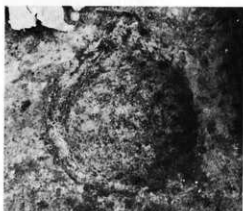
図版 3 VG7g住居跡



土坑1埋土



土坑2埋土



土坑1全景



土坑2全景



1



3

遺物の縮尺長



2

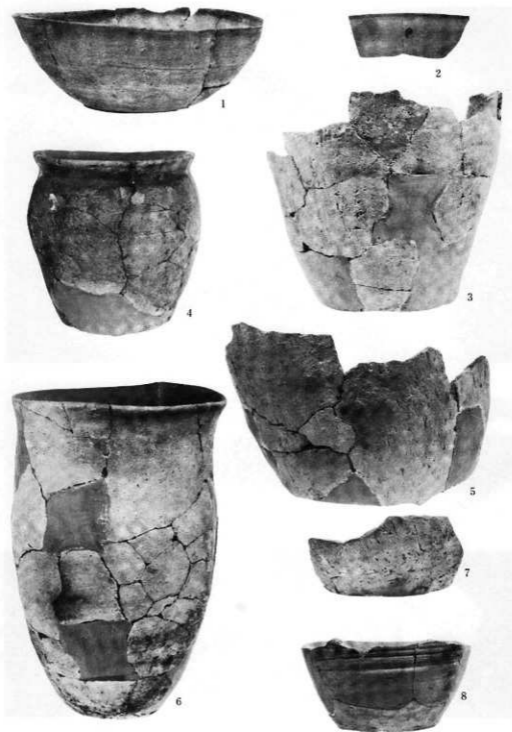


4



5

図版4 VG7g住居跡土坑・出土遺物



縮尺 1・2 は  $\frac{1}{2}$   
 他は  $\frac{1}{3}$

図版 5 VG7g住居跡・出土遺物





完 備



埋 土



カマド



カマド縦断面

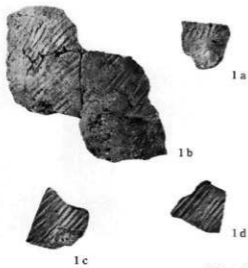
図版 6 VH2b住居跡



土坑断面



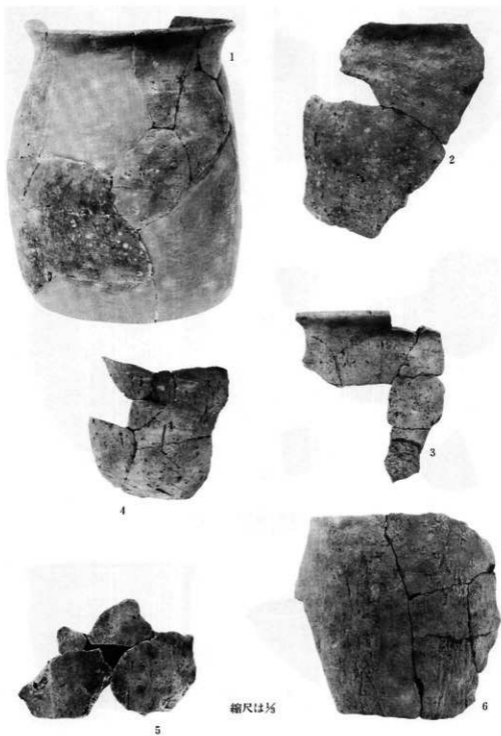
坏出土状況



遺物の縮尺 1・3は1/2  
2・4は1/4



図版7 VH2b住居跡土坑・出土遺物



図版 8 VH2b住居跡・出土遺物



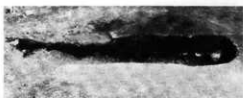
VF8j 住居跡状遺構



同埋土断面



同内土坑全景



同内土坑埋土



VF7 g 陥し穴状遺構検出状況



VF7 g 陥し穴状遺構埋土



VF7 g 陥し穴状遺構埋土

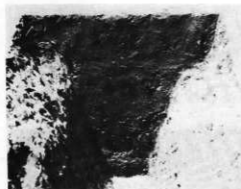


VF7 g 陥し穴状遺構全景



VF8 j 陥し穴状遺構全景

図版10 陥し穴状遺構



VG3g 陥し穴状遺構埋土



VG5 f 陥し穴状遺構埋土



VG3g 陥し穴状遺構全景



VG5 f 陥し穴状遺構全景

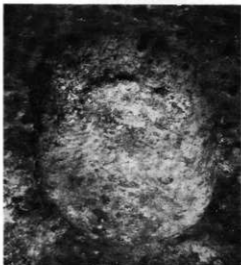
図版11 陥し穴状遺構



VG6 c 陥し穴状遺構埋土



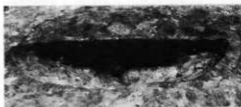
VH2 f 土坑埋土



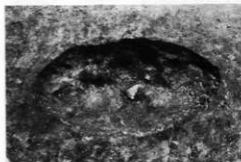
VH2 f 土坑全景



VG6 c 陥し穴状遺構全景



VH7 i 土坑埋土



VH7 i 土坑全景

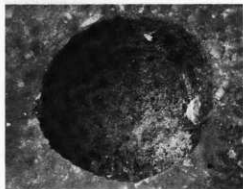
図版12 陥し穴状遺構・土坑



VF8 i 土坑埋土



VF7 h 土坑埋土



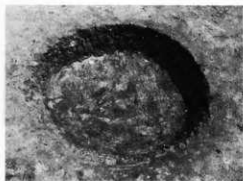
VF8 i 土坑全景



VF7 h 土坑全景

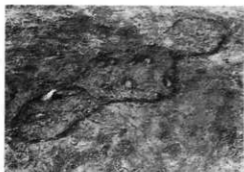


VI6 i 土坑埋土



VI6 i 土坑全景

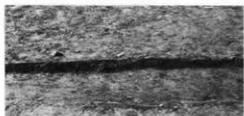




VH6 h 燒土



VH7 h 燒土



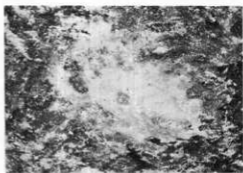
VH6 h 燒土断面



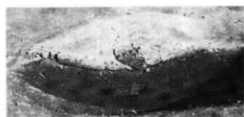
VH7 h 燒土断面



VH9 i 燒土



VH9 i 燒土

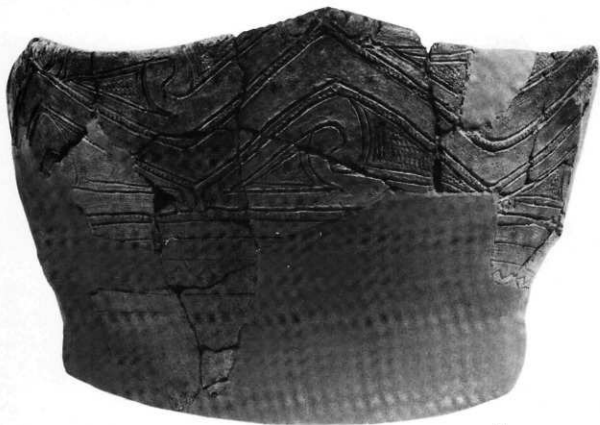


VH9 i 燒土断面

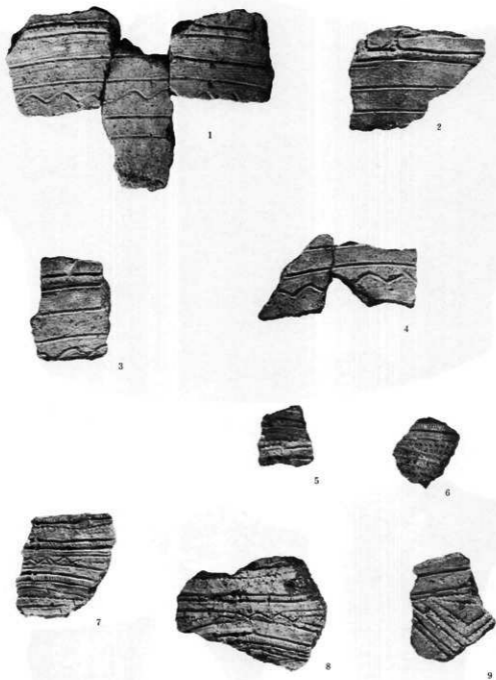


VH9 i 燒土断面

圖版14 燒土遺構



图版15 遺構外出土遺物(土器1)



縮尺 $\frac{1}{2}$

圖版16 遠構外出土遺物(土器2)



1



2



3



4



6



5



7



8



9



10



11

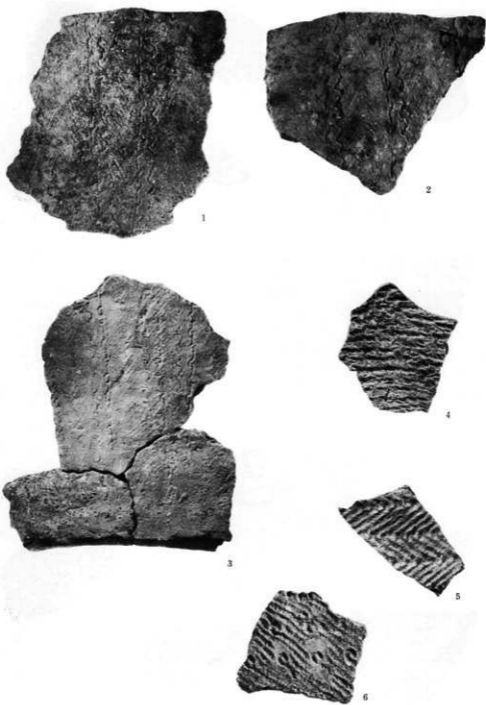
縮尺片

図版17 遺構外出土遺物(土器3)



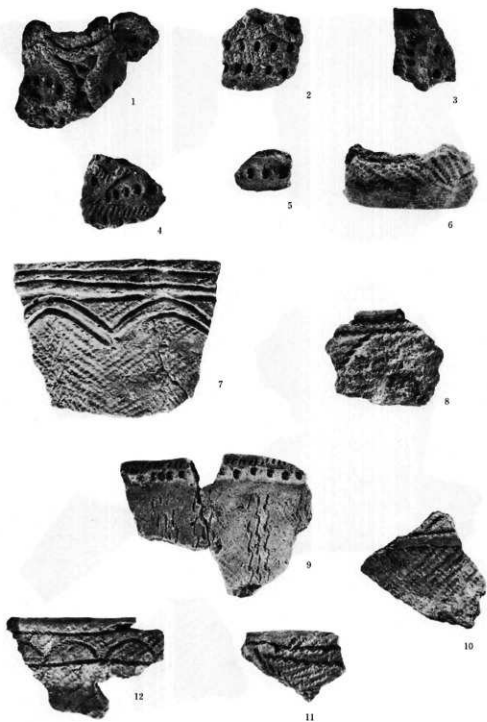
縮尺 $\frac{1}{2}$

圖版18 遺構外出土遺物(土器4)



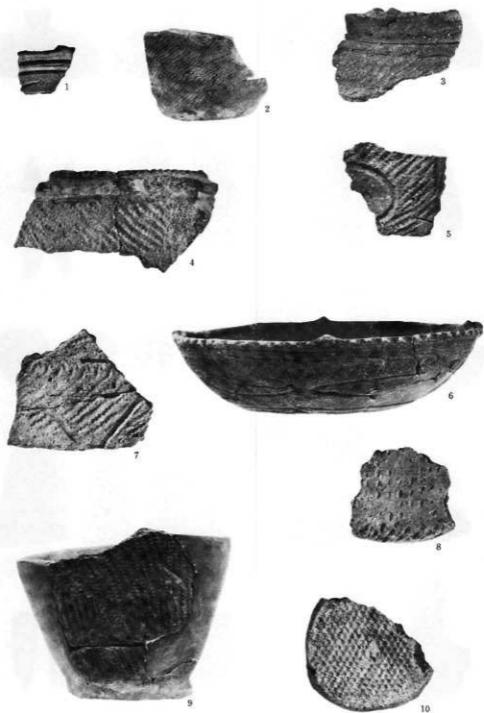
縮尺写

図版19 遺構外出土遺物(土器 5)



縮尺寫

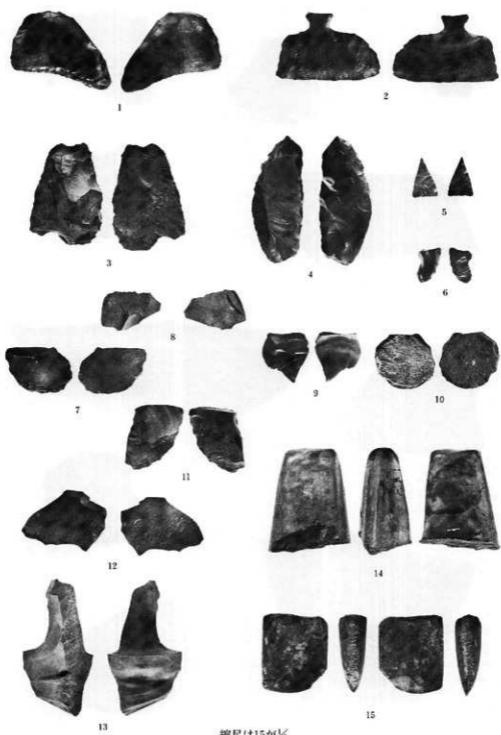
圖版20 遺構外出土遺物(土器6)



縮尺另

図版21 遺構外出土遺物(土器7)





縮尺は15が1/5  
他は1/4

図版22 遺構外出土遺物(石器1)



縮尺

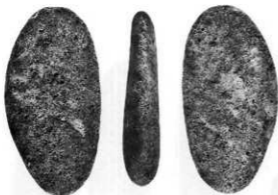
図版23 遺構外出土遺物(石器2)



1



2



3



4



6



5

縮尺片

図版24 遺構外出土遺物(石器3)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事 兼 所長	小笠原 喜一				
副所長	高橋 敬明				
〔管理課〕					
管理課長(兼)	高橋 敬明	嘱託		根橋 文一	
課長補佐	森岡 陽一	//		吉田 十春	
主事	佐藤 理	事務 技士員		佐藤 藤	
〔調査課〕					
調査課長	村上 康昭	文庫 専門	文化調査 財員	松本 建速	笹平 克子
課長補佐	鈴木 恵治		//	花坂 政博	佐々木 努
//	三浦 謙一		//	花坂 昭彦	佐々木 宏
主任 文化 財員	高橋 與右衛門		//	金子 昭彦	高橋 直人
//	工藤 利幸		//	演田 榮	星 雅
//	中川 重紀		//	羽柴 直	高橋 勉
//	藤村 敏男		//	星 高	鎌田 精
//	高橋 義介		//	高 木	鎌田 勝
//	高橋 正一		//	高 木	阿部 悟
//	渡辺 洋一	期 限 職 付員	//	千熊 新	熊谷 博
文庫 専門 文化 財員	佐々木 清		//	山内 博	山口 英
//	藤瀬 隆		//	小山 内	柳田 元
//	千葉 孝雄		//	菅 工	菅 工
//	斎藤 博司		//	高 溜	高 溜
//	東海 隆幹		//	佐 藤	佐 藤
//	佐々木 弘均		//		
//	川村 貞行		//		
//	鈴木 貞行		//		
//	伊東 邦雄		//		
//	斎藤 敏明		//		
//	神 信一		//		
//	佐々木 信一		//		
//	小原 真一		//		
//	酒井 宗孝		//		
〔資料課〕					
資料課長	村松 義夫				
文庫 専門 文化 財員	高橋 一浩				

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第194集

**上八木田Ⅱ遺跡発掘調査報告書**

新盛岡競馬場建設関連遺跡発掘調査

印刷 平成5年3月25日

発行 平成5年3月31日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 杜陵印刷

〒020-01 盛岡市みたち二丁目22-50

電話 (0196) 41-8000代